

〈原著論文〉

人間福祉学における「プロセス哲学」の意味と可能性 Part II ——福祉学上の方途的意味と展開可能性の軸芯を探る——

牛 津 信 忠

抄 録

ホワイトヘッドにおいては、西田幾多郎のいう無の世界との近似性を把握できる側面がある。特に、「根底無」の世界に広がる「極微の存在」が人間の意識的存在に連続して在ることを知ることができる。このような作用連関と捉えうる有機的世界がホワイトヘッドのいうプロセスの内実であるとわれわれは考える。このように捉える時、個という存在を、そこにある福祉の可能性から明らかにしていく道を根底的に提示できるようになる。そうした議論について論理的解明をなすとともに、この第二部の後半部分においては、ハーマンス等の思想を福祉次元における有機的作用連関の具体的な方途の開発例として取り上げ解題している。

キーワード：有機体的世界，相補性，連続性，存在参与，対話的自己

Part II 第七章 西田哲学とプロセス哲学——類似性のなかに福祉学上の方途的存立可能性を探る

第1節 西田哲学とホワイトヘッド哲学の相補性

第2節 プロセス哲学の福祉学に対する貢献可能性

第八章 プロセス哲学の方途的可能性と福祉学上の展開可能性

第1節 プロセス哲学の方途的特性

第2節 福祉的次元における具体的展開への示唆的考察

第3節 「対話的自己」と福祉のプロセスの考察

第七章 西田哲学とプロセス哲学

——類似性の中に福祉学上の方途的存立可能性を探る

第1節 西田哲学とホワイトヘッドのプロセス論の相補性

この章においては、まず西田哲学とホワイトヘッドの哲学の相補性に視点を当て考察していきたい。いわゆるプロセス哲学が、量子論を介して理解されていく時に、東洋思想と脈絡を同じくする

側面を持ち、特に西田哲学との関係性大なるものがあるということが明らかになる⁽¹⁾。

西田のいう一元的に捉えられる「個物」たる存立体は、「物質を構成する最終の實在」であるとされる。また西田は「真の個物は人格的自己」であるともいうのである⁽²⁾。これはいかなることを意味するのであろうか。彼のいう自覚の概念が、またその作用がこの意味を教えてくれる。個物は世界に限定されてある物的存在であると同時に、自覚を通して自己限定をするという精神的な存在でもある。ここにおいて物質的かつ精神的な存在であるという矛盾的自己同一性としての個物の存在特質に気づかされることになる⁽³⁾。

これに対して、ホワイトヘッドは、西田の個物に匹敵する存立体として「現実的實在 (actual entity)」という存在性を取り上げている。この「現実的實在」とは、量子力学をベースにして捉えることのできる存在における実質である⁽⁴⁾。この量子論については、ホワイトヘッドに従って、彼の時代の量子論的展開を忠実にたどりながら第一部において説述してきたのであるが、現代は時の流れを経て「量子論の時代」ともいわれる時代的変容をみるに至っている。したがって現代的見地からさらなる量子理論についての解題が必要であると思われるが、量子論の現代に至る展開に即してみても、基本的哲学次元においてはホワイトヘッドの思想の大幅な書き換えどころか、その基本路線の正しさが確認され再確認され得る状況であるということが出来る。しかしその表現上の変転や本論の議論の脈絡に即して書き添えが必要な側面については言葉を加え、注記を加えるという作業的対応を果たしていきたいと思う。ことさらホワイトヘッドと他の論者との比較検討を試みるにあたっては、第一部でホワイトヘッドについて述べてきた叙述において触れる必要のなかった細部を論じることが求められるため、必要に応じた知見を加味することがなされねばならない。

まず現代という時点に軸足を置き、ホワイトヘッドの時代からこの量子の時代といわれる今に至るまでの量子に関する基本を、改めて一般的著作を取り上げて解題していくことにより、量子論についての知識の広がり状況を見定めておくことにする⁽⁵⁾。

「量子論」ないし「量子力学」は、原子の内部構造を分析解明しそれが素粒子からなることを明らかにするとともに、その素粒子が電磁波となり空間に広がっており、したがって、素粒子は粒子性と波動性という性質を持っていることが明らかにされてきた。この論によると自然が人間の意識によって、形を変えて捉えられる。すなわち「連続した波動」にも見え「不連続な粒子」にも見えるという事態が量子論の物理学においては可とされる。ミクロ（特に極微）の世界ではこれが真とされることになる⁽⁶⁾。

量子論に従うと、無機物としてそこにある究極のミクロ的存在としての側面を捉えることができるが決してそれに止まらない。それとともに、この「現実的實在 (actual entity)」(ホワイトヘッド)とされる極微の存立態様は、自らを限定して創造に参与する存立性としての實在性を同時的に有する。すなわち『自己創造的被造物』である、という特性を存在の実質において備えているのである⁽⁷⁾。

このことについては意識の働きを介在させて理解していくことができる。西田に即していわれて

いるように、世界によって限定されると同時に自覚意識によって自己を限定する。これについては自覚の意識をも無とする場、絶対無ないし絶対無としての神的存立に媒介されるという理解のもとに解き明かそうとする言説も存在する⁽⁸⁾。

そこには矛盾的同一性と見える本性のなかに、自らを被造物としながらも創造性を同時に持つ存立体が総体存在としてある。それが「意識的経験の瞬間」の連続によって可能になっていくという存在の動態がここに看取できる。前述した「永遠的客体」における概念的感じを通じて受容するという作用態様が、「物的なもの」と概念的なものとを自らのうちで統合にもたらす、「他の一への統合過程」すなわち「合生」がこうして成立していくのである⁽⁹⁾。

ホワイトヘッドが示す究極のミクロ的位置に立つ思索、すなわち「連続性と原子性」「波動性と粒子性」の動態は、「自然現象に認められるのみならず、現実的諸實在の社会的存在としての人格を含む存立体たる諸持続物の経験のうちにも認められる」と説かれ、人格適合性の連続、およびその延長の連続が示される⁽¹⁰⁾。

これを西田の意識に関する思索に照合しながら理解していくときに、ホワイトヘッドのいう無機的な世界把握から精神世界への飛翔とも見える思索がより具体的にプロセスとしての連続性を持って位置づけられることになる。曰く「真に意識するものは、いわゆる意識として限定せられないものをも内に含むものでなければならない」。そこには潜在的な背後にあるものをも想定することができる。とすれば、それは「もはや意識ではない、力の発展となる」とされる。「真の意識」は「最後の無の立場」を根底とする。上に絶対無の媒介としたのはこの根底における作用と理解できであろう。この無の場を根底として考える時、本質還元を意識の場であるとする現象学的思索との繋がりを想念することができるとともに、意識の場を無の根源性故に、それに位置づけられ、深く広い層を持ったものとして理解することが許容されることになる⁽¹¹⁾。

このように西田のいう「真に意識するもの」についての考究は、前述したようにホワイトヘッドのプロセス論にいう「現実的實在」を支える連続性論を人間存在の内側から捉えることを可能としてくれる。そこには無機物から精神への流れを無の場所からそこに限定されないものを含む意識上の連続へと誘っていくプロセスの流れとして指し示そうとする企図が確実に伺える。ここに両者の相補性を見ることができる。西田の無に関する理論的推移においては無に関する宗教的根底認識のみに終始するかに思えるのであるが、そこにホワイトヘッドの論を裏打ちして理解していく時に、無機領域を根底的に含みながら精神の一たる存立へと向かいさらにその連続の可能性を持つ動的な様相が、限定されない意識の存立によって實在を明示していると理解していくことができる。

第二節 プロセス哲学の福祉学に対する貢献可能性

意識の動態に関して主語と述語の関係性を導入して解明していく次のような理解が提示される。意識の流れとしてみる時に「直接的には一般と特殊は無限に重なり合っている。斯く重なり合う場

所が意識である」として、西田は両者の包摂関係を示している。意識の究極に無があるとしても、ここにいう包摂関係から「種々なる作用の形」が考えられることになる。一般と特殊という「両面はどこまでも相異なったものであって、ただ無限に相接近していく」。その「極限に」「無の場所」があると西田は位置づける。そうすると「包摂判断の上では結合できない」。この根底において両者の包摂はただ「自覚の直感作用において結合する」ということになる⁽¹²⁾。新田義弘はこの「自覚の直感作用」について、直視する理解内容を「一般のなかに特殊を包摂していくことこそが知識であり、特殊のなかに一般を包摂することは意志であり、この両方向の統一が直感である」という見解を西田の言葉から導きだしている⁽¹³⁾。

このことの解題のために、ここでわれわれは中村雄二郎の思索に耳を傾けねばならない。中村は、西田の場所について、それを具体において限定している制度ないし拘束条件を導入して議論に現実性をもたらしてくれる。「その条件によって、限定、内部開放、自由の高度化が条件度合いの相違によってもたらされ」、「内部組織や構成が変化する」。こうして西田では、「絶対無や弁証法的一般者であった場所」が、「組み換えが無限に可能なシステム」としての条件世界の広がりがあるところとして捉えられることになる⁽¹⁴⁾。

ここに述べてきた西田の場所論を軸とした新田や中村によるその解題的理解の深化的考察により、われわれは、ホワイトヘッドの宗教上の考察に入る前段的意識の動態的側面を明確に把握できる理解に到達することになる。それは物的世界と概念ないし精神的世界の相互包摂的な合生過程の説述となる。それは無を根底とするか否かは問わずとも、宗教的領域の究極前における層に内在する意識が「自覚の直感作用」において「結合」していく作用動向を、さらに加えてそのための条件が各様の動態を持って関わってくることをわれわれに知らしめる。さらにそれは、量子論上のミクロコスモスの領域における無、ないし宗教的にそれを換言しわれわれ流に表現すると、神的領域においてある方向性を前提としながら「現実的實在」としての一たる存立体をさまざまなシステムの条件のもとで形作っていくことになる。その様相をわれわれに想念可能とする。そうしてわれわれのもとには「組み換えが無限に可能なシステム」の構築における連続が課題として残されることになるのである。この課題とはまさに前述した人間の潜在能力を含む創造的可能性を開発し続ける福祉的支援上の方途的条件の連鎖的存在そのものである。西田の場所論は、こうした場所が無を根底としながらも現実的領域においては、相互包摂的な各様の作用展開としてあることを教えてくれるのである。

われわれの議論は根底認識について西田に同調するものではないが、そこに至る意識の作用化に関して、彼の議論の展開ならびにそれに添う説述に依拠することが可能であると考えている。さらに西田が無と捉える領域にも量子力学的ミクロの世界が連続し、その継続のなかで全てを含む統合力への道が開かれると理解することができる。ホワイトヘッドにおいては、西田のいう無の世界、根底無の世界にも広がる極微の有機的存在が一たる人間の意識上の存在とも連続しながら存立する

ことがその有機体の哲学としての有様において前提にされている。この有機体状況ないし世界が、プロセスの内実であり、この次いで捉える時、福祉という目的状況は「極微の人間の存在を個々において捉えねばその個としての自由への飛翔を不可能とする領域」に存在の動態さらに躍動性を与えることができず、一という存立性をそこに見ることの可能性を開くことができないことを教えられる。このように人全てに一としての存在の価値を確立することを至上の道とする「福祉」ないし「福祉世界」の開花への道を、あくまでも理論的にはあるが可能とする論に近接することができる。このような論の方向をたどることにより、福祉学はその学問的本質論を堅固化することができ、ここにプロセス哲学の福祉学への貢献可能性を発見することができる。

以上のような意味を持つ意識の介在を経て、対象化される自我と対象化されない人格主体が両極性を保持しながら矛盾的同一性として関係性を持ちあう場に焦点を当てて、さらなる考究を進めてゆくことにする。それによって福祉学とプロセス哲学の一層の接点領域における思索の詳細へと議論を進めることができる。

第八章 プロセス哲学の方途的可能性と福祉学上の展開可能性

第1節 プロセス哲学の方途的特性

ホワイトヘッドのプロセス哲学における動的延長線をたどり続けるとされる「現実的實在」は、一（いち）の形成およびその客体化と、さらなる同時的な一（いち）の連続性を持つ創造プロセスの作用動態として描かれる。たとえそれが個物という形態化を可とする存在であっても、その存立の永続性に即してみるならば、そこにあるのは軸芯として存立の流れのなかにある作用とそれに即した実在的内容のみである。まさに、このようにしてプロセスとして永続する流れのなかで存在を捉えることが可能とされ、その實在の内実が見えないままに存在証明されるということがここにおいて可能とされるのである。

このような「現実的實在」そのものを、われわれは前章において意識の本源に帰還しつつ、その本質的存在上の態様と現実の積み重ねられてゆく内実の連続としてみたのであるが、これは、福祉というまさに人間の意識のなかにおける希求性を前提にし、その達成の継続を基本的にニーズの充足から調整的充足、さらには、その高度化への対応、総じて目的性に即していうならば、人間全てにおける健康で文化的なノーマルな生活の実現を可とする生活構造の構築に至る道を、人格の相互的存在参与のもとで創り上げていくことを課題とするわれわれの考察にとって必須の視座である。すなわち、人間存在全てにわたる存立の意味形成と、実態としての人間存在の継続的存立態様が、意識段階において、目的形成的総体の一致的継続動態として可能であることがここに確認できるからである。

いうまでもなく、このように物理学上のマイクロ世界の論を直ちに現実世界の動態における説明の

軸芯として用いようとするならば、さらに多くを語らねばならない。特に意識の理解についての詳細な説き起こしが必要となる。これについてはホワイトヘッドの論についてさらに詳しく分け入っていくことによって触れていくことになるが、ここでは物理学上のマイクロ世界を人間福祉の動態に用いることについての疑念という一点に絞って、短く触れておくに止める。この疑念に 대응するという初歩的な分析的な理解については、ペンローズ、ロジャーの論に対するシモニー、アブナーによる開示的議論を用いて、次段階の考察に繋ぐ架け橋となる範囲で下記しておくことにする⁽¹⁵⁾。ここでは論の軸芯について簡略化して触れている。詳細についてはペンローズの論およびそれへの反論を交えた著書を参照されたい。

シモニーはホワイトヘッドの有機体論に即しながら次のようにペンローズに答えていく⁽¹⁶⁾。

ペンローズはシモニーも指摘するように、人間の「精神活動のなかには、どんなコンピュータでも達成できない何かが在る」と考えている。これは「機械的に計算することと理解することの違い」に立脚するということができ、このことはさらに、意識に反映される各種の経験の二極面的な理解に通じる「脳の特定な状態の様相」であるとか、そうした精神的経験を明確に物理的概念には換言できないものの一定のクラス分けとしてならば位置づけることができる等々の理解が背景にある⁽¹⁷⁾。彼はこの領域の議論に三つの困難性を指摘する。①「高度に発達した神経系から精神が独立しているという証拠はない」。②「神経構造はそれのない原始的有機体から深化した産物である」。③以上の「無機組成物には精神的特性が全くない」ということがあげられる。

シモニーは、こうした困難性にホワイトヘッドの有機体の哲学が解への示唆を与えてくれているという。そこには唯心論的存在論がある。「現実的実在」が出来事の連鎖と同一的に高度に組織化されていく。それを「発展と呼ぶ」こともできよう。これによって「原始的な精神状態が強烈で一貫した」、すなわち一としての「完全な意識となる」。しかし、そこには「巨大なギャップ」があるといわざるを得ない⁽¹⁸⁾。

こうした疑念に対してシモニーは、量子論をさらに用いて究明を加え、「現代化されたホワイトヘッド主義を完成」させようとする。すなわち、まず量子論においては「系の現実的特徴を纏め上げ」それにとどまらず「潜在的な可能性を考慮して」「系の完全な状態」すなわち「系を最も詳しく特徴づける状態」を極めようとする。潜在的な可能性のなかに、その繋がりや連鎖のなかに客観的な確率の状態が示される。量子論の重ね合わせの論理がここには活用されている⁽¹⁹⁾。

シモニーが次に用いるのは、量子論の「絡み合い」の特質である。量子論的にみると上述の重ね合わせは、存在特性が相互に関係する方法が存立してはじめて成立する。それは「絡み合い」つつ全体状況にたどり着く。「絡み合い」はそれぞれの存立が潜在的に可能性の現実化を果たすことを必然化する⁽²⁰⁾。

シモニーは、ペンローズのこのような物理主義的に把握される精神の理解のなかには「宇宙で存在論的な基礎となるものとしての精神の概念が欠如している」とする。ペンローズは「精神的特質

を、脳の状態の構造的特性か、または神経の集まりによって計算を行うためのプログラムとして扱う」ことに終始してしまうことになる⁽²¹⁾。シモニーは、これに対してホワイトヘッドが「宇宙で最も原始的」ないし「当初的」とする「存在が唯心論的特性の原因であると考えている」ことに注視しており、反物理主義的道を採る。シモニーもホワイトヘッドも、唯心論的特性が存在の根底を流れる本源であると捉えている。そうして量子論をそれとの関わりで理解しているのである。ホワイトヘッドは、われわれがこれまでのプロセス哲学の解題にもみたように、「世界における精神表現の広大な全域すなわち「精神の完全な沈黙から上位レベルでの精神の高揚まで」を説述するための「他の知的用具として量子論を用いている」。まさに量子論を「精神の存在論や、二元的な存在論、あるいは現精神を付与された実体の存在論」の解明に用いていくことも可とされる。ペンローズが物理主義的に行おうとしたことを、現代化したホワイトヘッド主義は「最初から唯心論的な存在論に量子論の枠組みを適用」していくことによってなさんとするのである⁽²²⁾。シモニーは、こうしたホワイトヘッドの立場から「潜在的な可能性が実現していくのは知覚主体の心による」という仮説を設定する⁽²³⁾。さらにいうならば、この「心」がはじめに在りながら高揚していくことをも、当該仮説のなかに位置づけられていると解することができる。

われわれはシモニーのこのような仮説設定をさらに検証していくためにも、ホワイトヘッド自身の哲学にさらに分け入ってみたいと思うのである。シモニーのいう心への帰属を意識に関するホワイトヘッドの見解に照合しながら、具体性に向かってもう数歩先までみてゆきたいと思う。

ホワイトヘッドは意識について次のようにいう「意識は、誤りであるかもしれない『理論』と『与えられて』いる事実との間のコントラストを感じることに含まれている主体的形式である」。そのように描かれる意識は、「何らかの」ということと「それそのもの」という表現によって示された「永遠的諸客体内のコントラストが、重要性へと向かい高まることを含んでいる」⁽²⁴⁾。このように意識は、「原初相」ではなく「後期相」に属するとされ、「意識は、合成のより高次相において生じ来る主体的形式」である、さらに「意識は、原初的には、それが生じてくるより高次相を照明する」のであり、「初期の諸相を照明するのは、それらがより高次の段階における構成要素として」派生的に残っている場合のみである⁽²⁵⁾。

このように、意識は精神の高次相として捉えられるとともに、それ故に主体としての位置づけを次第に持つことに繋がるのである。さらに意識は、「それが生じてくるより高次相を照明する」のであれば、そこには志向性を内在させていることが明らかであり、他との相互存在のなかにおいても個における主体性の度合いが濃く存立していることも明らかであり、さらなる主体化へ向かう可能性を看取することができる。

われわれの本質把握における人間存在の動態を、全体的許容の本源にまで至って把握するときこの認識に至ることができる。これを本質の本源の把握ということができよう。意識の流れにおける本質の本源性のなかにある意味形成の本源をわれわれはここに見ることができる。

この意識はホワイトヘッドがいうように経験によって啓発されてゆくものであろう。したがって、その本質といいながらも経験上の深化によって時代的段階性を否み得ないという状況をわれわれは福祉論の状況のなかに例証を取り上げ多くの具体に直面していくなかで、時代的制約における本源に添う流れないし営みを、引き続く時代的な営みの連続のなかで経験してきたのであり、またさらに経験していくことであらう。意識性が福祉価値への動態を見失うことがないかぎりにおいて、本源と離反することのない営みを現出させていくことになる。

そうした経験が個物にとっての希求性を前方志向的に、また後退をもその個物の特質に即して表現していく。それが条件的に求められることも多く在るであらう。その志向作用は、最終的に個における価値発揚の条件となるように条件活用をなしながら福祉的目的性への志向化の方向をたどる。その道程においては経験を通じて意識の真中であって一たる自己を位置づけている諸要素が、より福祉上の現実に近い表現を用いるとすれば、一たる自己の顕在しているさらに潜在化している創造的力たる前方への確実性を内包する能力の主体的発揚、それを自己啓発性ないし自己啓発力という主体としての統合性への目覚めとするならば、そのような方向に自己限定への力点が置かれ、その極限への道とともに一たる存立に至って、客体化がなされていくことになる。そのようなプロセスに志向性の本源を置くことが限定されながら限定していく極限への道の必須条件となる。

このプロセスにおける主体的自己形成という一（いち）への道にある存立体について、また「個」としての存在という意味においての（上記一という存立と同様）その重要視を起点とする福祉上の考察故に、「現実的實在」を起点とするミクロ的視点を維持しつつ議論を進めることにする。

主体的自己形成と他者との関わりがここでの主要論点となる。福祉という目的的かつ意志的行為を内容とする行為連鎖においては、人が人に関わるという在り方が基本となる。人間同士の相互の関係性においては、それが個人的であろうと集団ないし集団内での関係であろうと、さらには集団同志の関係であろうと、基本は人と人との関係である。福祉的関係性を問う時には、それが人格関係を軸心に据えねばならないことをわれわれはこれまで諸稿⁽²⁶⁾の議論のなかで明らかにしてきた。その人格関係、強いていえば主体的応答関係に自我主体間の意識段階の相互性とそれとの運動（もうこの段階では運動を前提にして考察することが許されるであらう）の元にある対象化されない人格主体という作用存立体が相互に連続する自我存在と人格主体、および人格主体間の相互性等における複雑多岐にわたる関係性が考えられる。この関係性において、人と人は、人格的関わりを持つことを必須とする。これはミクロの段階においては「現実的實在」間の融合につながる関係性と見ることができるが、それは一となる存在への道における人としての人格上の主体確立を意味する統合作用の作用化がそこにあり、それ故に存立体への進行途上にあるという事実によって意味を持つことができる。

それは自我上の個性的存在というような意味における人格との人間同士の関係性を経ながら、さらに人間の間柄における物化的対象化を離脱していくプロセスを経て、個的人格主体へ至り、さら

に同時的・並行的に社会的人格主体へというように高揚をたどっていく。まさにそれは意識の高次元という作用進行による「心」の上位化に基礎づけられる精神の高揚がそこにある。

そのプロセスは、ブーバー, M. 流の対話的行為による出会い等を通じてのシェーラーの言葉を用いると「存在参与」として認識可能であり、あるいは、より福祉的な言葉を用いるならば、「寄り添い」⁽²⁷⁾の連鎖にある人格上の統合性の連続作用として捉えることができる。そこでは「共感共同」の現実化⁽²⁸⁾という無数の個として統合化された現実的実在同士的作用連鎖が存在し続ける。

しかしここでは、意識の介在を経て対象化される自我と対象化されない人格主体が両極性を保持しながら矛盾的同一性として関係性を持ちあう場の存在に焦点を当てて考究を進めてゆくことにする⁽²⁹⁾。

その場においては、絶えず意味形成的な、換言すれば創造的な営みが人における一たる存立への道程を支えながら存立していく。このような場を前提にして存在を位置づけていくときに、われわれは、はじめて人格と人格相互間における、また個的人格の内部に向かってもその相互存立とそこにおける存在参与の連鎖（重ね合わせの連鎖ということもできよう）を実在として捉える可能性の元に置かれ、それにより、具体的に福祉次元の人間存在の探るべき方途性への道が開かれる、そのような心の高揚といえる状況における方途的特性を見出す可能性が与えられる。それによりプロセス哲学の指し示す方向性ととのさらなる緊密な連関性を認識することができる。

第2節 福祉的次元における具体的展開への示唆的考察

このようにまさに福祉領域における人格次元の基礎考察を可とする意識上の連続とそれに統合性として作用していく軸芯たる主体性の連続的作用化に関する思索の道は、「現実的実在」としての一たる存立についての思索であるとともに人間存在の本質的営みについての考察でもある。すなわち、これまでの議論は、福祉思想との一体性をもって理解することができる存在の本質論であることを確認していく論脈の形成推移であったのである。

次にそこにいう一たる存立体の意味形成の営みを「対話的自己 (Dialogical Self)」⁽³⁰⁾と題する自己と対話に関するハーモニス, H. 等の思想を例示的に用いながら、福祉次元における具体的方途を開発する支援技術の領域に属する考察をしておきたい。こうした具体領域における考察をすることによって、われわれが取り上げてきたプロセス論と福祉の含有する意味とが比較検討され、これまで明示してきた論点がより明瞭な位置づけを得ることになる。それは福祉上の方途性=技術上の意味を際立たせてくれる。

それは果たして自我領域上の支援対応でありながら人格領域の存在の本質に関わることができるものなのであろうか。まさに対話という「存在参与」の具体状況のなかでホワイトヘッドやシェーラー等に即しながら述べてきたこれまでのわれわれの議論がここに検証されることになる。もしそれが本質に関わるものであったら、支援技術からのすなわち基本的に技術が立脚している自我

領域という極からもう片方の人格極への架け橋が支援技法の具体においても可能となることが示唆的にせよ開示されることになる。

前節に述べた福祉上の方途性に関する叙述のなかには単なる抽象的關係性のみの説述に終始し、具体性に欠ける内容が多く、例示的、示唆的に方途的特性として前述した内容を現実的かつ実在論に即しながら福祉上の具体と関連づけて述べておく必要を感じる。それ故にこうした節を設け。第三部の理論展開の具体における支えとしておくことにする。

ハーマンスらの論は人間存在の位置づけやその存在性と対話的自己の關係などの議論にも見られるように、われわれが重視してきた存在の本質性たる現実的実在ならびに主体的人格性への道を本質的存在の道として福祉の具体的展開そのものと関わりを持たせながら人格論的福祉論（ないし人間福祉論）を論じるに際して極めて示唆的な内容を提示してくれる⁽³¹⁾。以下にその検証をかねて関連する部分について考察を加えておく。

ハーマンスは、「自己」と「対話」について次のような実践論上の位置づけを与えている。二者のなかには、それぞれ「ポジションの独立性と閉鎖性を説明する」側面と、「相互依存性と開放性を説明する」側面とが内在している、とする⁽³²⁾。關係性の連鎖としての存立を経て一たる存立を形作っていく「現実的実在」について問うときに、この自己という存立体が、内在的に、自己という存在が関わる他との対話のなかにあるという一見矛盾すると思える位置づけから出発することは福祉上の人間存在の態様把握にとって間主観的な關係性の明瞭な理解への道を開いてくれる。

自己状況と対話状況とは、上述のように、その位置づけにおける「独立性と相互依存性」ならびに「閉鎖性と開放性」というように一見すると対立構造を持つかに見える態様を同時存在させている。しかしこの態様にある流動的で定まりなく見える状況内に現実としての作用的構造化がありそれを見つめることによって、關係性の具体を見ることが可能となっていく。

そのような営みの詳細な分析的把握と具体的關係性そのもののミクロ的接近によって、そこにある動態が把握できる。それ故に自己と他者また「他者たる自己」の間において、また自集団と他者集団同士において対立的かつ相互依存的關係が生じ、そこに破壊的対立以外の道が採用される場合において、相互依存的な關係性をもった対話が生じる。あるいは、対立的対話を経て相互依存的に、またさらなる対立の増幅へ、それを経た關係性の模索へと無限ともいえる關係性への道がたどられ、そこに継続という方向価値が存立していくのであれば、対話的相互依存から相互主義的存立が人間の志向する道となって定立されていくことになる。無限とは記したが、ハーマンスらも述べるように、一定時点においてみるときに、「個人的な見方」や「コミュニケーションの内容や方向性の調整」による手段的領域での対応が可能である。具体として次の説述は参考になる。「相互作用の支配性、話題の支配性、会話の量、戦略的な働き」に加えて「間主観的なやり取り」をもたらす「双方が互いに開かれ、一方が他方に自分の順番を採る機会を与える」というような行為等、われわれの身近に感じる支援上の対応が必須要件となっていく。この連続的な実践行為が継続また延長を支えてい

く⁽³³⁾。

こう見てくると、意味形成作用による創造への歩みが、支援的行為のなかにはあるといえよう。すなわち次段階への道があり、これまでの流れとの連続性を持つ継続という現状の延長のなかに持続価値を成立させる意味上の堅固化、広がりさらには高揚というような意味内容上の在り方としての創造性向を含む。そこに創造という持続志向的でしかも高揚的な意味形成を通じての一(いち)を形作ることのできる価値動向が作用するのであれば、対立にせよ共存にせよ結果性における相互主義的な主体的関係が存立し続けるということになるであろう。さらにいうと、それを選び取りながら持続していくという暗黙の前提としての統合性たる主体性がそこには潜在的にせよ顕在的にせよあるという状況が見えてくる。一たる現実的実在の客体化から次段階の一たるに値する発揚的継続へという相互主体的営みがこのように無数に生き躍動していくのである。こうして創造—継続—主体性が相互連関する状況が存在の終結を選び取るのでなければ存立し続けることになる。その連関がこの文脈における真の主体への道という意味を形作っていくのである。これを人間世界の次元においてみるときに真の人格主体への道、またその高揚への道に通じていく⁽³⁴⁾。

福祉が福祉であるためには、このような連関性がそこに意味形成的に絶えず形作られてゆき、その継続的(広義に捉えた)自他関係のなかで、目的的な作動がなされていくことになる。その作動において、目的性として選択される内実は何であるかが、単なる継続という現状維持を越えた延長の方向性のなかで探求され続ける。そこに福祉という大前提をおいてここでは論を進めているのであるが、それは人格論的な大前提・本質性としてわれわれが捉えた志向の軸芯からの方向付けであった。われわれが提示してきたのは、人格主体すなわち統合作用という継続の本質作用であった。すなわち、それによって一たる持続が可能になる創造の核となる作用であった。それは何らかの良き状態(well-being)としての福祉という一般認識とは直結しないかに見えるのであるが、しかし前述の支援的働きかけという例示においてみたようにその作用によって(流動的で直結しないかに見えるとしても)結果的に人格が支えられることになり人間の個的存在が、人間の社会的な共同存在、さらには永遠への価値的存立に繋がる「秘奥人格(シェーラー, M.)」性が可能性を与えられていく。そのような人格存在の主体性を支える主体的条件が、さらに人間の生活全体に視野を広げてみていくときに、生活構造上の問題解決的な内容⁽³⁵⁾であり、経済社会上の状況改善的内容⁽³⁶⁾であり、あるいは人間における潜在能力の発揮という意味を持つ前方志向性⁽³⁷⁾であるというように、状況変動のなかに継続基盤のステップアップとしての良化を含む延長体成立の条件的な要件を形成していくことになるのである⁽³⁸⁾。

人間存在全てにわたる存立の意味形成と、実態として人間存在の継続的な存立態様が、継続する意識の延長線の各次元・段階において、「良き」という目的形成的な総体の一致的でかつ継続的な動態を保持可能にする。これが人格存立の条件となる。

このように、人間の動的営みのなかにはその継続を前提とするかぎりにおいて、「良き」という

倫理的志向性を本質的かつ動的に組み込まざるを得ない必然的法則性が働いていると理解することができる。

ところで、ハーマンスとケルペン (Hermans, Hubert J. M. & Kempen, Harry J. G) は「自己」と「対話」が共通する特徴を持つとして二つの特性を指摘しているが、この議論を解題的に進めることにより、上記の議論がハーマンスらの基本的考察の脈絡における具体状況と関連を持ち、そのなかに内包される局面を持つことがさらに深く明らかにされる⁽³⁹⁾。

まず、ハーマンスらは、人間の具体的な存在局面についてみていくことにより、自己の分離性と自律性が相互に交代する行動における支配動向が存在し、人の存在はそれに応じて各様の形を採ると主張する。次に自己の開放性と参加が対話の間主観的な相互性と対応しながら存立している、としている。

前者の議論についてみると、自己の現存立状況において内在する自律は現状況からの分離・離脱によって高められた形で姿を現すことができるとの主張であると理解することができる。すなわち解題的に述べると、その現在的に形成された自律はその不確かさの発生因子の影響下において浮動状態を生じその事態から離脱志向への移行という支配性の交代が生じることによって高揚への道が可能性として開かれてゆくとの理解が可能である。

後者についてみると、自己自身の世界への開放性、さらに何らかの集団や事象への参加ということは、間主観性の原点状況、すなわち自他未分化の体験流 (シェーラー, M.) のなかで生じ、それ故に他との何らかの対話という形態を内にも外に向かっても採りながら、それは自らの内なる他との相互性を核とすることが多い。このようにみていくと、対話的自己における相互性とは、世界開放的な自己存在の過去から現在、未来に至る全ての相互的關係性を意味している。われわれの視点からすると対話とは世界開放的な自己存在の間主観的な関係要件として把握することができる。

こうした相互的な特徴を持つことによって対話的自己が存立し、そこにおいては「無数の可能なストーリーが所与となる」。このようにして多様なストーリーが必然的に生じるというハーマンスらの意見が表明される。われわれは「現実的實在」という存立体の客体化から延長的自律への推移を前提にするが故に、この多様性の一つ一つの内実を重視する方途に同意することができる。彼らは、そのなかにおいて「対話的自己における二つの機能レベル、すなわち顕在・表層レベルと潜在・深層レベルの区別を図る」ことが意味を成してくるという。「現象的に多様な語りは、顕在レベルのものである。しかし潜在的な機能レベルにおいては、限定された数の基本的な力や動機が想定され、それは個人的にも集団的にも顕在レベルにおけるストーリーの内容や組織化に影響を与えていくことになる⁽⁴⁰⁾、とするのである。

ハーマンスらの理論によると、上記の顕在、潜在の各レベルは、前者がバリエーション概念に、後者が動機概念に結びつく、とされる。このバリエーションという概念が示すのは「自己反省に基づいた積極的な意味構成の過程」であると位置づけられる。また「人は時間や空間を超えたさまざま

まな状況にいるため、さまざまなバリエーションが、それが位置づけられる「バリエーション・システム」のなかで現れたり組織化されたりする」とその動的状況について説述している。さらに「それぞれのバリエーションが特定のパターンを持つ感情を有し、それがバリエーションに意味づけられる」⁽⁴¹⁾。その状況についての考察内容が、各バリエーションそのもの自体をそれぞれに明らかにする術（すべ）となるというのである。その考察プロセスにおいてバリエーションに内在するないしそれを構成する部分としての感情が明らかになる。

人が価値づけという行為に及ぶときにはその人が何かを感じているという感情の動機がベースにあるが、その感情のなかにはハーマンスらという基本動機たる「自己高揚への努力」や「他者との接触や結びつきへの切望」が反映されることになる。さらに「個人のバリエーションの感情成分は、潜在的な動機的基層の表れである」という理解が示されている⁽⁴²⁾。

このようなバリエーション・システムが、ハーマンスらという「I ポジション」の内部に存在している。これが他の人との発話における元となり、そこに対話がその影響を受けてなされていく。ここに対話的自己の構造が、その姿の概要という形で片鱗をのぞかせてくれる⁽⁴³⁾。

この対話において、相互に作用形成されるなかに存する「支配性」の影響に焦点を当てることのできることをハーマンスらは提起している。そこには個人史や所属する共同体の価値が例示されていくことになる⁽⁴⁴⁾。これらおよびそれに類する多数の支配性をも個人のポジション構造を知るうえで質的重要性を持つことはいままでもあるまい。この議論は彼らが主張する「一極集中化」⁽⁴⁵⁾に関係してくるとも理解することができる。しかしハーマンスらは、「自己と現実との共同構成をもたらすダイナミックな相互関係の一部となるようなストーリー」ないしは「文化的理想」としての「自己の基本的多数性、および対立する力の同時存在」を重視することの重要性を主張するのである。こうして、多数のIポジションが仮定されることになる。そのポジションは意識の強度によって支配性が異なってくる⁽⁴⁶⁾。

その多様性の元に生じるIポジション間の対話的運動（dialogical movements）によって発現するのが「意味」であるとされるのであるが、ハーマンスらは、それは、「想像上の空間」「ポジション」「やり取り」「支配性」が構成する「意味構成の過程」を伴う、という⁽⁴⁷⁾。

彼らがいうように世界についても自己についてもわれわれは空間的に捉えることができる。つまり「例えば自己と対面しているとき、われわれは目の前のどこかでポジションを持つ者としての自分自身を」、また「緊張状態にある二つのポジションを持つ者としての自分自身を」みることができる。このように「想像上の空間は知覚できる空間と並び織り交ぜられている」。「両者は強い相互関係にある」なかにおいて、「併置され」つつ「意味あるパターンをもかたちづくって」ゆく⁽⁴⁸⁾。しかし、こうした意味への接近も「依然としてかなり静的なものである」とされるが、「対話的運動」によって意味形成へと営みを実体化していけると彼らはいふ。「対話的活動」の行為化により、「われわれは特定のポジションのなか」ではなく、複数の「ポジションの間にいるようになる」。こう

して「対話のはじまるときには存在しなかった意味が新しく現れてくるような仕方では出会うとき、意味形成の過程は能動的なものになる」。対話的なやり取りにより総合的であったり、また想像を駆り立てる新たな意味形成が可能になったりする⁽⁴⁹⁾。さらに対話の支配性について述べられる。対話において在る意味が支配性を保持すると他は無視されたり抑止的になったりすることになる。こうしたことが生じる二つの理由があるとされ、一つは一極集中化された自己状況の故に、もう一つは、人の個人史に由来するとされる。これらが「対話的運動を鈍らせたり」、「それらを行き詰まらせたりする要因となる」⁽⁵⁰⁾。われわれは、こうした事柄に注視しつつ、スムーズな意味形成的な対話の遂行を求められている。

このようなハーマンスらの意味形成過程に関する実践上の発言は、実践例のなかにおけるより豊かな対話の存在を求める。このような対話的自己の構造的把握は、われわれがホワイトヘッドに従ってみてきた「現実的實在」の自己としての作用動向の極微の状況内での相互的内実姿に近似する。あるいはそれそのものの支援方途内における実際上の流動的な作用展開を指し示している。

ハーマンスおよびケルベンらの人に対する支援実践論は人間の具体的な関係性に即しながら、自己と自己自身さらに世界との関わりにおける対話のプロセスをわれわれが言及してきた出会いや存在参与という作用展開の相互関係的な実践上の前提として指し示しているといえる⁽⁵¹⁾。こうした把握の方途は、ハーマンスらの対話的自己という表現にあるように、相互的に関わりを持ちそこから何かを前方志向的に進めていこうとする人と人を相互包摂的な集団関係のなかにおいて、さらには諸集団間において前提としており、まさに上述してきた人格作用化の条件としての福祉的な「良き状態」(well being) という希求性を継続のなかで定位置化(無限ともいえる多数性の元にあるとしても総体として)するものである⁽⁵²⁾。

この作用動向と作用条件としての構造は、われわれに福祉支援技術を多種多様にしかも柔軟に駆使する方途上の示唆を与えてくれる。

第3節 「対話的自己」と福祉的プロセスの考察

われわれはプロセス哲学の福祉上の具体的な有効性を確認するために、福祉的な支援原理の定式化された内容の一つを例示的に取り上げて下記して説述を加えておく。著名な周知の支援技術原理——バイステイックの原理を用いる。あまりにも一般的な原理上の説述となるが、その一般性が、ここでは必須であるが故にこの原理的な方途上の表現と意味づけを用いることにする。バイステイックの福祉原理は、周知のように個別化、意図的な感情表現、統制化された情緒的関与、受容、非審判的態度、クライアントの自己決定及び秘密保持という支援技法上の7原則によって構成される⁽⁵³⁾。

こうした福祉における支援技術上の原則が上述してきた対話的自己における相互関係性のなかで行為原則すなわち方向性を規定する価値設定という意味を持つことになるとわれわれは理解する。

これが相互の出会い、対話さらには存在参与における行為原則として作用する価値方向性そのものとなる。この原則の吟味検討と対話的自己論との細微にわたる整合性の考察は、さらなる課題とされようし、よしんば原則としての合意が得られようともその活用においてはIポジションの多数性元で数多の方途的ニーズ充足上の多様な対応の有様を見出すことになるだろうが、それでもその原則構造は、一般性という視点で見るとかぎりにおいて、ここに一応の総括的適用性を持つ内容となし得るといえるであろう。原則とされる諸事のいくつかを拾い説述への糸口とし、さらに注記においてその他を補っておくことにする。

まず「個別化の原則」とは、まさに自己という存在が人格主体という存在根拠を持つことを本質において前提とするそのような原則であると解することができる。「現実的實在」たる一という存在にまで達する深さを持つこの原則は、ストーリーの源泉であるとともにそのIポジションとして集約される内実を何らかの形で保持する位置を持っている。したがって対話を通じた自我上の掘り下げた究明を人格主体という本質存立根拠に基づきながら（それが作用である以上、形としては捉えられないことに留意しつつ）遂行していくということが必須となる。次の「意図的な感情表現の原則」とは、個の一たるに達する究明のために特に自我上の自己存在の回りを取り囲む壁となってその個の実際を隠している全てを取捨選択していくために必須とされる。取捨選択としたのは、その壁となって存在している何ものかのなかにはその個人の存在性そのものがあり得るからであり、それを介してその個人が開示されることがあるからである。この原則にいう意図的という表現の意味には特に対話に臨むワーカーに対する課題的方向性が内在している。さらにわれわれの視点から重要性を持つのは、「受容の原則」と「クライアントの自己決定の原則」である。受容についてはクライアントの徹底した理解を求めていく、まさにその一たる個の現実的實在としての自己をあるがままに理解するためのクライアントへの存在参与を求める方途的立場が示唆される。対話とそれによるワーカーとクライアントとの出会いという存在参与の実質への道がここにある。この受容とはクライアントのストーリーを偏見なく理解してその根拠に基づき理解による存在参与をする支援技術上の究極ともいえる原則である。さらにクライアントの自己決定の原則は、クライアントの自己存在が対話によって存立基盤が次第に堅固化され決定という勇氣ある行為への道が築かれるプロセスの強固な歩みを内包する。それは何らかの支配性の存在故に生じる無視や抑制を乗り越え、自己が対話に復帰できるような道に立つことができるように、「現実的實在」の一たる自己形成体が自らをたとえ喪失していると想念してしまっているとしても、実質と連続する条件設定の在り方次第で、個における本質へ回帰していくステップそのものを意味的運動のなかで構築していく対話プロセスがここにある。

それ以外の残された重要ないくつかの原則を含めて、注に本稿の論に関わる概説を記しておくことにする⁽⁵⁴⁾。

それらは人における「現実的實在」の営み、すなわち一への道におけるまたその客観視の元に前

方に開かれるための条件明示としての意味を持つ。その対話的自己は、他とのまた他集団との間に共感共同を形作り、さらにその構成単位における一たるに値する在り様をその潜在能力にまで働きかけて形作っていくのである。これがまさに福祉の道程である。

いふなればそれは世界のさらには宇宙的な遂行状況内における、福祉という価値追及的な存在態様の、一としての存在プロセスへの客観視を通じた相互参与の動態作用の提示そのものである、と理解される。

かくして、素粒子の作用という量子力学的な物質的継続としてしか捉えられないかにみえた「現実的實在」が、福祉にかかわる人間全ての、あるいは一たる個々の、意味形成作用という意識で捉えられた価値遂行のなかで、総体としての意味の核となる統合作用という様態の中身としてその姿を露わとするのである。

以上はあくまで広義の福祉形成すなわち（広義の）Well-beingを目指すという価値前提の元に論じた支援技術領域の具体を部分的に切り取った内容に過ぎないが、それを元にして、さらに総体としての価値的世界への道に視座を拡大していく。この価値世界はさらなる福祉状況の一般化および高度化とも一体化していくが、さらにそれを越えて、両極性の元に究極における宗教的価値さえをも仰ぎ見ることができる、そうした究極性への示唆をもわれわれに与えてくれる誘いの道となっていくのである。

注

- (1) ホワイトヘッドと東洋思想との関連については考究が進められてきたといえる。特に仏教思想との比較研究が顕著であるが、哲学分野に絞ると西田幾多郎の禅思想を取り上げて代表例として論じている著書が目立つ。ここではサルカによる下記の書を用いて参照している。特に自我、純粹経験、純粹自己等という概念と、一としての自己についての関連考察に注目した。Sarkar, Anil Kumar, "Buddhism and Whitehead's Process Philosophy", South Asian Publishers, New Delhi, 1991.
- (2) 山本誠作著「ホワイトヘッドと西田哲学」行路社、1985年、90頁。
- (3) 同書91頁。
- (4) 同書91-92頁。
- (5) 岸根卓郎著「見えない世界を科学する」彩流社、2011年。岡部成玄「量子論—運動と方法」近代科学社、1992年。
- (6) 上掲同書、「見えない世界」、130-133頁。本著にいうように、世界ないし宇宙の全ては、「人間の観測方法」によってその姿も行動の形においても多様な形態を取る。「宇宙の万物は、観測方法によって、ある時は連続した波動のように見え、ある時は不連続な粒子のように見える」、したがって「その姿を正確に知ることは決してできない」。同書128頁。これを観測するわれわれの意志と関連させながら表現すると、量子論的には次のような論が示される。「見えない存在は、人間の心そのものであり、見た瞬間に現実のものとなる」。まさに意識が世界を変えとも理解できることになる。同書138頁。
- (7) 上掲書「ホワイトヘッドと西田哲学」92頁。
- (8) 同書91頁。
- (9) 同書93頁。

- (10) 同書 93-94 頁。
- (11) 西田幾多郎著「場所」西田幾多郎全集第四巻, 岩波書店, 1965 年。236-238 頁。牛津信忠著「社会福祉における場の究明—共感共同からトポスへ至る現象学的考察」丸善プラネット, 2012 年, 78 頁。
- (12) 上掲「場所」274-276 頁。この解題は上掲「場の究明」79-80 頁参照。
- (13) 新田義宏「現代の問いとしての西田哲学」岩波書店, 1998 年, 41 頁。
- (14) 中村雄二郎は、「述語的表現が無限に可能な領域」の広がりを示唆するのであるが、ここでは彼が指摘するようにトポスの創り方が問題となる。すなわち「主語的同一性に基づく論理学の世界では、トポスの創られ方は問題にならなかった。」しかし「述語的な展開においては、問題に対する実在の相に応じ、トポスの創られ方に応じて、適切な言葉と論理が選ばれる」のである。ここに拘束条件が作用する。「述語的展開が場所を形成し、それが拘束条件となる」とすれば、ここに相互性が、内部的要因と外部的要因との間に絶えず働いていることが想起される。中村の場所論は、相互性、ないしリズム振動理解によって「態様」の連続としての「場所」を提示してくれている。この注記については、中村雄二郎著作集 X 「トポス論」岩波書店, 1993 年, 344-345 頁参照、および牛津信忠著「社会福祉における場の究明」82 頁参照。
- (15) Penrose, Roger, with Shimony, A., Cartwright, N. and Hawking, S. “The LARGE, THE SMALL AND THE HUMAN MIND”, edited by Longain, M. University of Cambridge, 1997. 中村和幸訳「心は量子で語れるか」講談社, 1999 年。
- (16) 同書, 222 頁。
- (17) 同書 224-226 頁
- (18) 同書 227-229 頁。
- (19) 同書, 230-231 頁。
- (20) 同書 231-232 頁。
- (21) 同書 235 頁。
- (22) 同書 235-237 頁。
- (23) 同書 242-243 頁。
- (24) Whitehead, A. N., “Process and Reality, 1927-28”. 山本誠作訳「過程と実在 (上)」, 1984 年, 松籟社, 280-281 頁。
- (25) 同書 281-282 頁。
- (26) 例えば、前掲「相互的人格主義」第 2 章における人格主義的社会福祉論の哲学的基盤の考察等。
- (27) 窪寺俊之著「スピリチュアルケア概説」をはじめとした教授のスピリチュアルケア論のなかに「寄り添い」の実践的な在り方が説かれている。第一部の 6 章に垣間見た寄り添う福祉上の関係性については、このスピリチュアルなケアの側面と思想的かつ実践上において緊密な連関を持つことを必須とする。この面における第一人者としての教授の論を参照されたい。
- (28) ここにいう「共感共同」の現実化こそが、われわれの位置づけた「共感共同の場」における「現実的実在」の相互性とそれによる一への道を条件づけていく福祉上の方途に他ならない。前掲書「社会福祉における共感共同の究明」を参照されたい。
- (29) 両極性の総合的理解に焦点を当て、方途上の議論を実例を用いながら考察していく。
- (30) Hermans, Hubert, J. M. & Kempen, Harry, J. G., “The Dialogical Self”, Elsevier, 1993. 溝上慎一・水間玲子・森岡正芳訳「対話的自己・デカルト / ジェームス / ミードを超えて」, 新曜社, 2006 年。
- (31) 上掲書における「自己」と「対話」の成熟のなかに「I ポジション」への道が描かれ、自己という存立体は多数のポジションから成立するとともに、そこにあまりに支配的なポジションがあるときには、内部的に無視や抑止が働くことになる。こうした多くのポジションはダイナミックに総合化されていく。個々のポジションには相対的自立性があるという主張、また非線型システムとして自己を捉える人間観はわれわれにとって重要である。すなわちポジションの総合として自己を捉え

る在り方には現実的實在の多様な絡まりのなかで一たる人間の存立と総合化という統一のさらなる展開としての延長的創造を果たす新たな一への道が非連続的連続として続いていく、こうした議論と共通項も多く、自我上の様態から延長への飛翔を可とする支援技術としての意味を感じさせてくれる（特に当該訳書、第5章および第6章）。

- 32) 同訳書 197 頁。
- 33) 同書 197-198 頁。
- 34) この議論はホワイトヘッドの延長論にわれわれの人格主体における前方からの統合性を整合化させて理解をするときに到達できる論である、延長論上の人格論ともいえるわれわれの論の中間的な結論である。
- 35) 牛津信忠著「社会福祉における相互的人格主義」久美出版。2008年、当該書における人間の生命基盤を確立するため「生活構造」の個におけるニーズに即した確立に関する議論を参照されたい。
- 36) 同書における、上記生活構造論の確立と質の高度化、およびそれを人間社会において可能とする「互酬構造の確立およびそれを制度的にも可能とする中間セクター」の確立と広がりへの達成に関する議論を参照されたい。第I部 142-143 頁および 186-190 頁。
- 37) 同書に記述したアマルティア・センの「潜在能力説」についての説述とその展開の福祉実践における応用を参照されたい 第II部 10 章 1 節。
- 38) 同書は第I巻、第II巻の全体を通じて、この人間の一たる人格性に至るための、それと多様な軸線の交錯のなかで繋がりを形成していく現実的生の一方の極における条件を探りつつ、これが精神性の核となる人格作用に如何にしてもう片方の極を持つかを論じている。
- 39) 上掲訳書、ハーマンス他著、溝上慎一・水間玲子・森岡正芳訳「対話的自己」、新曜社、2006年。197-198 頁。
- 40) 同訳書 199 頁。
- 41) 同書 199-200 頁。
- 42) 同書 200 頁。
- 43) 同書 200 頁。
- 44) 同書 216 頁。
- 45) 同書 217 頁。
- 46) 同書 217-218 頁。
- 47) 同書 220 頁。
- 48) 同書 221-222 頁。
- 49) 同書 223 頁。
- 50) 同書 224 頁。
- 51) われわれがこれまで存在参与として思想の抽象性のなかで述べてきた人格間の相互の作用態様が、ハーマンスらによる実践行為に関する説述のなかで、より現実化される可能性を与えられたといえるであろう。
- 52) 人格主体の作用動態という極と自我上の実践極とは、その両極性故の矛盾的同性のなかにながら、「現実的實在」という一たる存立の多様な展開のなかで動的に高揚していく。
- 53) Biestek, Felix Paul (1957). *The Casework Relationship*. Chicago: Loyola University Press., 尾崎新・福田俊子・原田和幸訳、「ケースワークの原則—援助関係を形成する技法」誠心書房、2006年。
- 54) 「統制された情緒的関与」とは、ワーカーが。クライアントへの関係性においてあくまでも物化的対象化することなく、その存在への存在参与を遂行することを求める原則である。「非審判的態度」とは字義通りワーカーが権威者のごとくにクライアントに接することがないようにと求める原則であり、対話と出会いの存立のためには必須の原則である。さらに「秘密保持」の原則とはワーカーとクライアントの信頼関係に基づく対話とそれによる本当の出会いを可能とするために必須とされる原則である。

The Meaning and Possibility of “Process Philosophy” in Human Welfare Theory, Part II: The Study of Core Logic in Methodological Meaning and Development Possibility in Welfare Theory

Nobutada USHIZU

Abstract

Whitehead’s theory includes a theorized part through which we can grasp the approximation to the world of “nothing,” as advanced by Nishida. In particular, we can learn about the submicroscopic existence that spreads into Nishida’s world of “fundamental nothing” by scrutinizing the intentional existence of man. We realize that the organic world as such an operational connection is the reality of the “process” propounded by Whitehead. With such an understanding, we can fundamentally show the way toward clear individual existence with the possibility of welfare. Where operational connection exists, continuous meaning formation, i.e., creative working, is also present. While making a logical elucidation about such an argument, in the second half of part II of this study, we consider and expound the thoughts of H. Hermans and others as an example of developing a concrete way of organic operational connection in a welfare dimension.

Key words: organic world, complementarity, continuity, Seinsteilnahme, dialogical self